

15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	水明インターネット句会（選句・選評） 令和六年十月
			総太郎	一駄歩	暦文 佳月 ひでこ 六弦 京子	破れ蓮	総太郎			ありぎりす 佳月 凡士 小麦	のり子 素風	暦文 風子		ありぎりす	
藤の実の庭に防犯カメラキラ	秋茄子や揚げたり煮たり炒めたり	切りもなく蟹が駄句吐く夜長かな	公園のベンチにスマホならぶ秋	告白を待ってる少女星月夜	赤道を切ればマントル青蜜柑	うそ寒に酔余の興も醒めにけり	秋茄子やかぼちゃおばけの売り子さん	しゃくりが止まぬ夜の月コイン色	山深しけもの径にも草紅葉	悪口は拾うふ補聴器蚯蚓鳴く	秋の日に一朵の雲も無かりけり	風立ちてそよぎうべなふ秋桜	赤蕎麦や夕陽重なり燃え上がる	留守の間に伯母の手料理衣被	
しーしー	ひろ志	瞳人	石関六弦	松橋春水	ありぎりす	安田蝸牛	横井あらか	新井のり子	森 佳月	荒一葉	破れ蓮様	幸子	衛	檜鼻ことは	

ね。親しきお付き合いの叔母との交流を通し平穏な日々を活写しています

赤蕎麦や夕陽重なり燃え上がる
中七のフレーズが素晴らしい。中七の措辞が秋桜を詩的に表現。

秋の空の広さが伝わる。 秋晴れが上手く表現されている。

最近の補聴器は高性能ですから（笑）。聞きたくないことが妙に聞こえたりするものです。耳が遠くなっても悪口はよく聞こえるというが、それを補聴器にも。悪口は聞こえるらしい。

「酔余の興」という措辞が巧みである。

赤道を切るとは、壮大な一句。マントル対流が見えますか？地球の内層を句に読んだことは新鮮。青蜜柑の季語も素晴らしい。スケールが大きく、青蜜柑との取り合せもいいですね。色の対比が鮮やかです。

結果が知りたい。

椅子に腰かけた人達が、皆スマホをいじっている光景をうまく表現されていると思います。公園でも紅葉よりスマホなんですよ。ね。

30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	水明インターネット句会（選句・選評） 令和六年十月
	俳翁	月を	風舎 風子			あき		梗舟	一葉 しんい 瞳人 恵 マスミ 俳翁 ひでこ 一駄歩 楽 1号 絵夢 京子	允孝 音思	しんい 破れ蓮 稀香	稀香 風舎		あらか 梗舟	
秋の烏ひそかに疼く母ごころ	鏡抜きの新酒の薫る祝樽 慶事と新酒がうまく融合した詠みである。	アビーロードをジャケツの四人夜仕事へ アビーロード懐かしいですね。	路線バス明日は廃線秋桜 失われた30年への虚しさが伝わってきた。人口減少の厳しい現実。反対に秋桜だけは元気だ。	秋刀魚焼く夫より少し大きい 蛇口より流るるこれも秋の水	髪を切り色なき風の過ぎにけり 秋風と少女の姿を想像した。	ミサイルの急接近や夜這星 最寄りの駅前の大木を思い出します。	けたたまし烏ねぐらに秋の暮	秋晴を呑み込む河馬の大欠伸 秋晴れの一日、河馬の大欠伸がいかに長閑。おおらかでユーモラス。大きな口だ。秋晴れを呑み込むという把握が見事。秋晴れの明るさ、のどかさ、ユーモアも加わりスケールの大きな一句と思う。やつと秋が来た。河馬も猛暑の疲れを吐き出すかのように大欠伸。秋晴れを喜ぶ大らかな心が良い。大きな詠みぶりがかつユーモラスである。秋晴れの下での河馬の大欠伸、おおらかで楽しい。大きく開く音まで聞こえそうです。秋晴れを河馬の大欠伸で表現して面白く思いました。のんびりと暖かで平和な秋の一日。ネンテンさんの拍手が聞こえそう。秋晴との比較の発想が良いです。	秋の川朽ちて切なき舳ひ舟 秋にびつたりの俳句ですね。秋の風景の油絵、何度も色を重ねて様々な色に染まる葉を描いている様子を思い浮かべました。	杭のみの瀬しぶきとなる崩れ梁 漁が終つたあとの寂寥感。「杭のみの瀬しぶきとなる」が良い。手練れな句です。崩れ築の景に秋の深まりも感じる。	いつの間に身寄り無き身やきりぎりす 蠡斯の哀愁漂う姿は人間にも通じる。身につまされた。季語の取り合わせが良い。芭蕉句の本歌取りか。	日本海寒し漁師の朝早し	朽ち舟の櫂横たはる星月夜 取り合わせが意外で、夜の浜辺の美しい絵だと思いました。情景が見えてきます。		
光雲 2	しんい	森下山菜	いさむ	和田イチ子	富沢恵	蛸のまま	秋谷風舎	孤舟	河野凡士	新曆文	松田素風	みづる	小林陸人	くるみ	

45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	水明インターネット句会（選句・選評） 令和六年十月
道を小麦			みづる 順一	マスミ 京子	破れ蓮 ひろ志 音思	幹子	月を		一葉 たか 六弦 小麦 絵夢		暮風	ことは 凡士		たか	
秋風の吹き残したる臍の疵 <small>誰にでもある臍の疵、ちよつとやそつとでは消えませぬね。</small>	紫金山飛ぶ宇宙次まで平和なれ <small>おじいち やん1号</small>	混ぜ飯の手軽さ釣瓶落としかな <small>高原ひろし</small>	秋澄むや我に褒美のモンブラン <small>木村小麦</small>	かの山もかの川も亡く秋深む <small>日高道を</small>	色に色重ね雑木の紅葉かな <small>後藤允孝</small>	落葉を集めてスキー子らの声 <small>一駄歩</small>	村まつり巫女の務めに慣れし吾子 <small>風信子</small>	訪ね来て臨時休業秋の雲 <small>立野音思</small>	秋暑し選挙ポスター皆笑顔 <small>本橋稀香</small>	女王の飛び去りし空冬隣 <small>山川充</small>	球拾ひだけの部活や夕薄 <small>丸山マスミ</small>	竜胆に出会ひてうれし山路かな <small>大東暮風</small>	神無月二三三に茂のヒ <small>網野月を</small>	兄の背を追ひて駆け出す花野かな <small>龍野ひろし</small>	<small>花野を兄の真似をして駆ける弟の可愛い姿が眼に浮ぶ。微笑ましい句であります。</small>

60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46
		春水	喜夫							しーしー		暮風 1号	順一	一葉 しーしー 風舎
晴れ渡るスーパームーン秋深し	母の指の傷と栗飯の艶と	鮫鱈を喰らひて泣くや喜寿の夜 <small>鮫鱈の季語が際立ってます。</small>	秋天や老いの最後の曲がり角 <small>秋づめという深まりゆくきせつに、最後の曲がり角を感じこれからどう生きるか？</small>	秋燕朝夕二便の時刻表	古希友や彼方の便り秋惜しむ	星明り竹馬の友は今いずこ	古寺の渡り廊下に舞ふ紅葉	筆談で暮らす夫婦に秋しぐれ	冷まじき株の暴落新首相	励ましの代わる代わるや鳥渡る <small>鳴き鳴き渡る鳥の声が聞こえるようです。</small>	神無月奴湯奴決めかねて	老翁の背筋を伸ばす紅葉かな <small>ふと見上げると圧巻の紅葉に出会えた驚きと喜び。</small>	秋の蜂二時間待ちの大病院	長き夜や点訳絵本の読み聞かせ <small>夜の読み聞かせ、しかも点字の絵本、親子の情がしみじみと伝わる。鳴き鳴き渡る鳥の声が聞こえるようです。作者の優しさと聞き手の前向きな気持ち伝わってきた。</small>
雪待月田猫	かげろう	持永喜夫	ひびい	岡崎梗舟	絵夢	佐藤幹子	岡本たか子	あき	総太郎	小林土璃	霜里	鈍幹	平野楽	青木鶴城

75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	水明インターネット句会（選句・選評） 令和六年十月
	ひでこ たか 楽	六弦	楽	光雲2 しんい 允孝 素風		蝸牛 素風	土璃	佳月 凡士 暮風子 梗舟		允孝				土璃 恵 ひろし みづる のり子	
かき分ける笑顔双子の乳母車	国境のどちらにも咲く秋桜 <small>国境の両側は秋桜が入り乱れて仲良く咲いているのに、人間は争っている。素晴らしい反戦句です。敵対し、同じ民族でありながら往き来ができない。こんな国がある。悲しい現実をとらえた句であります。世界平和を祈りたいものです。</small>	花の名を幾度聞く母秋桜 <small>秋桜が何か切ないですね。</small>	コンビニのおでんのふくろ野分あと <small>凄まじかった台風を思い出します。</small>	一掬の舌に広ぐる新走 <small>舌に広ぐる新走のフレーズが素敵。一掬の措辞がいい、新酒美味しそう。私はお酒は全くダメですが、新酒はさぞかしおいしいのでしょ。喜びに包まれる、新酒の試飲の光景が目につかぶ。</small>	別腹の更に別腹秋渴き <small>季語「柿の秋」が効いている。子規の名句を想起させる。</small>	斑鳩の鐘も床しき柿の秋	朝露を蹴散らしてゆく仔犬かな <small>爽やかな早朝の景が立ち上がり、気持ちのいい句です。</small>	うそ寒や見舞へば母の「どちらさま」 <small>認知の母を詠んだ句は多いが、本句はストリートで小気味よい。今の母上は明日の我身、「うそ寒」でまだ救われている。季語との取り合わせが良い。高齢の母の施設を訪問すると良く分かります。</small>	秋風や明日は家路の旅枕	まだまだと頑張る余生秋の蟬 <small>余生は大切です。大いに楽しんでください。</small>	昏れる庭明るさ保つ花芒	木の実満ち鳥がその木を基地とする	「美形なり」と言ふは空酔ひ冷まじや <small>雨を得てみずみずしさを増した毒茸は、我が意を得たり。「呼吸きらきら」が効いてますね。毒茸の季語が効いている。雨上がりの情景が浮かぶ。「きらきらしているのが呼吸というのいい。雨粒に濡れた毒茸が輝く「呼吸きらきら」の表現が美しい。毒茸の描写がいい。</small>	毒茸の呼吸きらきら雨上がり	
ありぎりす	石関六弦	松橋春水	新井のり子	安田蝸牛	横井あらか	破れ蓮様	森 佳月	荒一葉	檜鼻ことは	幸子	衛	石川順一	染谷風子	小林京子	

90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76
	瞳人のり子	マスミ			春水	みづる	蝸牛	ことは絵夢	恵喜夫	しーしーひろし	ありぎりす道を		蝸牛	
彼岸花の見ごろヴァチカン大使館	猫と子の寝る間に洗う障子かな 日常の優しい1コマ。	バス降りて茜さす坂うろこ雲 バスを降りてふと空を見ると、うろこ雲が夕陽に染まっている。しばし空を仰いで佇んだ。疲れが取れたようだ。	赤い羽根よじれやすきを仕舞いたり	星月夜となりの吾子のあごにひげ	立ち止まる猪瓜坊も立ち止まる 緊迫感が現地にいるかのように伝わります。	坪庭に鳥の賓客秋の雲 いつもの鳥でも、美しく整った坪庭なればこそその「賓客」であり、一幅の絵にもなれる。	目路遙か黄金に染まる稲筵 稔り田の連なりが見える。	偕老や六十年目の冬支度 これからもこれまで同様仲睦まじくすごされますように。硬いきづなのダイヤモンド婚、偕にゆきたしとこしなへ。	老年のいま読む三島おけら鳴く 味わいの深い一句。老年になって読み返す三島は若き日とはまた違っていることだろう。読んだものが三島であることに意味がある。三島文学の美と今の自分との乖離、哀しい秋なのか？	秋袷鏡の母に見つめらる 形見の袷を着た私が母そっくりなのです。	冬ざれや峡は深さを齢（よわい）とす 「峡は深さを齢とす」の措辞に惹かれました。	お仕舞ひを美津子ゆきけり志ん生忌 齢と言っても万年単位をさらりと詠んでしまう俳眼に感服しました。	渡り鳥宵の空から声が降る 「声が降る」が良い。	叡山に鐘の響きや朝寒し
森下山菜	蛍のまま	和田イチ子	富沢恵	河野凡士	秋谷風舎	孤舟	松田素風	新曆文	くるみ	みづる	小林陸人	瞳人	しーしー	ひろ志

105	104	103	102	101	100	99	98	97	96	95	94	93	92	91
			田猫									光雲2 幹子 1号 田猫	暦文	
嶺嶺を行く霧の双眸日差し享け	吉報をチーズケーキで出迎へて	秋灯や京に花街屋敷町	吹く風は宇宙の鼓動星月夜 <small>スケールが心地よい句。</small>	秋暮るるテント一張梓川	長き夜や録画楽しもピーナッツ	いわし雲浮かびて消ゆる友の顔	茶を飲みて菊の節句を祝ひたり	霜降や今朝の沼田場は濁り立ち	沈む日を招き返すか薄の穂	爽涼や父母ヶ浜（ちちぶがはま）の水かがみ	蜉蝣の骸を運ぶ秋の蟻	コスモスや子の連れ帰る風の色 <small>季語重なりですがとてもいい句です。連れ帰る風の色という表現が上手いですね。子の連れ帰った風の色が明るくカラフルで楽しそう。コスモスのピンク色と風の色との対比が鮮やか。天真爛漫な子どもの映像が浮かぶ。</small>	蔵出しの新酒の便りそろそろか <small>子供の頃、指くるくるしてトンボを取ったものです。</small>	母の真似指くるくると赤とんぼ
高原ひろし	木村小麦	風信子	後藤允孝	一駄歩	本橋稀香	立野音思	大東暮風	山川充	丸山マシミ	光雲2	網野月を	龍野ひろし	いさむ	しんい

120	119	118	117	116	115	114	113	112	111	110	109	108	107	106	水明インターネット句会（選句・選評） 令和六年十月
	ことは 月を	ひろ志				道を			ひろ志 春水 あらか 音思	土璃	一駄歩	あらか 俳翁 順一			
蟹味噌を溶かし溶かしてもう一杯	ラ・フランス男に二言無しと言ふ <small>品のあるエスプリを感じます。季語と句意の取り合わせの妙を感じました。</small>	酒蔵の壁の白さや秋夕焼け	歩数計秋桜そよぎ応援す	こども園のブラスバンドや秋の空	ふるさとの畔、風、黄金、曼殊沙華	何事もてげてげが良し年の暮れ	金木犀彗星の尾を眺めた日 <small>ロマンチックな句ですね。</small>	雄の一生果たさむと舞ふ秋の蜂	柏手は強く打つべし神無月 <small>なるほどそのとおり！と感じさせられました。なるほど、遠く出雲におわす神様に聞こえるようにか、という納得感。神の留守の間は柏手を強く打つことで安心したいという気持。</small>	機関車の便を待ちをる木の实かな <small>木の実は遠くまで行きたいのか。メルヘンチックでいいです。最初「便」はなくともよいかと思いましたが、やはりいりますね。</small>	辻々で追いかけきたり金木犀 <small>散歩の時の金木犀の香りそのものです</small>	葉隠れに誘ふ色香や毒茸 <small>中七までの密やかな艶めかしさを「毒」の一字が突然裏切るのので仰天した。とはいえ確かに毒茸の方が見た目は良いかも。毒茸の姿態を擬人化して実にうまく詠まれていて脱帽です。</small>	撓ふ枝先に七つの次郎柿	月代や明神裏の平次塚	
持永喜夫	ひらこ	岡本たか子	絵夢	佐藤幹子	小林土璃	あき	総太郎	平野楽	霜里	鈍幹	おじいち やん1号	青木鶴城	渋谷きいち	日高道を	

														水明インターネット句会（選句・選評）	令和六年十月												
														128	127	126	125	124	123	122	121						
														稀香	あき 喜夫			光雲2 瞳人 ひろし 田猫				総太郎 あき 幹子					
														魔女二人通る改札ハロウイン <small>魔女の姿で電車に乗ってお出かける女の子達の楽しげな様子が浮かびます。ハロウインももう季節に準ずるとして戴きました。</small>	人生の余白少し松茸買ふ <small>旬のもの食べたいよね。ふと立ち止まり、自分の人生あと何年あるのか、今の自分にご褒美をあげたい。</small>	残月の都市を鴉の啼き合へり	ひよどりの鳴き声満ちて畑を去る	落柿舎に投句箱あり嵯峨の秋 <small>落柿舎で一句投函してみたいものです。投じたくなる。芸術の秋に相應しい句。</small>	ゆふぐれや木犀の香に染まりけり	快晴や金木犀の匂う朝	林檎むく個室の母のまくらもと <small>母と子のトリノゴ・寂しい感じたが心は温かい。入院されているお母様に寄り添い、林檎を剥かれている作者の優しさがうかがえます。</small>						
														俳爺	俳爺	小林京子	石川順一	染谷風子	かげろう	雪待月田猫	岡崎榎舟						